

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 5 6	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳) Level of response to alcohol within the context of alcohol-related domains: an examination of longitudinal approaches assessing changes over time. アルコール関連ドメインの中でのアルコール応答レベル: 時間変化を評価した経時的アプローチの検討	
執筆者 Trim RS, Schuckit MA, Smith TL.	
掲載誌 (番号又は発行年月日) Alcohol Clin Exp Res. 2008 Mar;32(3):472-80.	
キーワード アルコール依存症、潜在成長曲線、反応レベル、コーピング、経時的、ピア	
要 旨 背景： アルコールに対する低レベルの応答(LR)が多量飲酒のリスクを増強するドメインと関連することは、断面研究を通じて今まで研究されてきた。しかしながら関連するドメインの多く、24 時間以内に消費される飲酒の最大量(MAXDRINK)や仲間との飲酒(PEER)は大人になるにつれて減少する。本研究は個人のアルコールの LR が、複数時点のアルコール関連ドメインを予測するかについて San Diego Prospective Study により評価した。	
方法： アルコールの LR は San Diego Prospective Study のベースライン(T1)から選ばれた 174 人の男性から評価され、MAXDRINK, PEER や飲酒に抵抗すること(COPE)の測定値が 15 年後(T15)、20 年後(T20)、25 年後(T25)に収集された。	
結果： T1 におけるアルコールの低 LR は、T15 における MAXDRINK と COPE の高値を予測し、それは先行研究と一致した。潜在成長曲線モデルを用いると、T15 における MAXDRINK の高値は長年にわたる PEER drinking の減少が小さいことを予測していた。追加的な解析によって、T25 における MAXDRINK の、T20 における COPE の時間別の効果は、両ドメインの growth factor を考慮した後でも存在が確認された。	
結論： これらの評価は、LR が将来的に関連する結果を前向きに予測していた。またアルコール関連のドメインが大人になるに従って、どのようにお互いに関連しているか明らかにした。治療に対する提要について議論され、飲酒に抵抗することが問題アルコール使用に対する重要な介入ポイントになるかもしれない。	